

やはり俺の神喰らいは
まちがっている。

銀電火

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

2050年代、突如として発生した『オラクル細胞』は地球上のありとあらゆる対象を「捕食」しながら急激な変化を遂げ、多様な生物体として進化した。

そして、通常兵器の全く通じないこの生命体を、いつしか人は「アラガミ」と呼ぶようになった。

人類はアラガミに対抗する為に神機を作り上げ、それを扱いアラガミと戦う神機使い、ゴッドイーターを生み出した。

時は流れ、2071年――

ある少年がゴツドイーターになろうとしていた。

目次

#01	こうして、彼のまちがった生活が始まる。	1
#02	なんにせよ、慣れというのはおそろしい。	17
#03	それでも、彼は足掻き続ける。	32

#01 こうして、彼のまちがった生活が始まる。

日曜日とは、一体なんだったのか。

日曜日、つまり今日。

俺は思う。どうしてこうなった、と。

今日が俺にとって「いつもの」日曜日なら、家のテレビの前でアクビをしながらゴロゴロとしていただろう。

だが俺は今、外出している。

この俺が日曜日に外に出ているということは、極めて異常かつ稀な事態なのである。道を行き交う人々は、こんな御時世でもそれなりに活気があり、日曜日を謳歌している。

恐らく、それは良い事なのだろう。

だが俺にとってその様子はヘイト値上昇の原因でしかない。

日曜日の有り難さをまるで分かっていない。日曜日は休日だ。「休む」「日」と書いて休日だ。

休めよ。

——などと考えているうちに目的地に着いてしまった。

街の中心部に位置するこの巨大な建物、『フェンリル極東支部』。

俺はここに何をしに来たのか、その答えは簡単だ。

俺は遂に、遂に——

就職してしまった。

「ようこそ……人類最後の砦『フェンリル』へ」

頭上のスピーカーから男の声。

上の方に窓が見えるが、そこから監視しているのか。

人影は3つ、話しているのは恐らく中央の人物だろう。

「今から、対アラガミ討伐部隊『ゴッドイーター』としての適性試験を始める」

適性試験とは、神機使いになる為の重要なファクターの1つだ。

適性試験と呼ばれる事もあるが、何より怖いのは “試験失敗＝人生終了” という事だ。

だが『志願者が減少する』等の理由で、その事は公表されてはいない。当たり前である。

まあ、現在はほとんど失敗する事は無いらしいが。

「少しリラックスしたまえ、その方が良い結果が出やすい」

「……バカ言え」

「うん？何か言ったかな？」

思わず本音が出てしまった。聞かれてはいないようだが。

しかし大事なこともなのもう一度。

バカ言いな。

目の前になんかえげつない機械あんぞ。

リラックスとか出来る訳ねえだろ。頭おかしいんか。

「では、心の準備が出来たら中央のケースの前に立ってくれ」

やべえよ、やべえよ。手え入れたら「ガツシャーン！」ってくるヤツだよコレ。俺、死ぬのか？この歳で？小町、悲しんでくれるかな……？

「顔色が悪いが、大丈夫かね？比企谷君？」

おっと、イカンイカン。しつかりしろ俺。心の準備など家でして来ただろうが。ちなみに小町は俺の妹な。誰にもやらんぞ。

言われた通り中央のケースの前に立ち、内部を覗き込む。

あるのは、鈍い光を放つ黒い刀身。

紛れもなく、神機。

短く息を吐いて窪みに腕を入れ、神機の把手を握る。

突然、ガシャンと音が響き機械が俺の腕を挟み込んだ。

「ぐッ!？」

痛み、そして違和感。

それらが混ざり合った途轍もない不快感に思わず声を漏らしてしまった。

だがその不快感はすぐに無くなり、腕を挟み込んでいた機械はゆっくりと開いた。

俺の腕には、赤い腕輪が装着されていた。

神機を持ち上げると、驚く程軽く感じた。

どうやら、神機使いになった時点で身体能力は格段に上昇するようだ。

「おめでどう、君がこの支部初の『新型』ゴッドイーターだ」

『新型』というのは、最近開発された形態変化が可能な第二世代神機の事だ。

旧型神機は可変機能を持たず『剣』と『銃』の2種類があるが、新型は剣形態と銃形態を自由に切り換える事が出来る。それはつまり戦闘において臨機応変に対応する事が出来るので、かなり重宝される存在となる。

「適性試験はこれで終了だ。次は適合後のメデイカルチェックが予定されている。始まるまで、その扉の向こうの部屋で待機してくれたまえ。気分が悪いなどの症状がある場合は、すぐに申し出るように」

はつきり言おう、最悪の気分だ。

「期待しているよ」

期待に応える気は更々無いがな。

「……はあ」

俺は溜め息をつき、ベンチに腰を降ろした。

ふと辺りを見渡すと、俺と同じように適合試験を終えて待機していたであろうヤツと目が合った。

俺は静かに視線を逸らす。そして軽く舌打ち。

こうする事で大体のヤツは話しかけてこない。ぼっちスキル発動である。あ、よく考えたら普通にしても話しかけられた事ほとんどねーわ。

「ねえ……ガム食べる？」

なん……だと……

俺の洗練された『話しかけるなオーラ』をこうも簡単に打ち破ってくるとは……

なんというコミュ力だ……

だが話しかけられた以上、無視はできん。話しかけられて嬉しかったわけじゃないんだからね。

「いや、遠慮しておく」

「あ、切れてた。今食べてるのが最後だったみたい。ゴメンゴメン」

「そうか」

なんだこいつ。

「アンタも適合者なの？」

「まあな」

「オレよりも少し年上っぽいけど……まあ、一瞬とはいえオレの方が先輩ってことで！」

よろしくー！」

「ああ……よろしく」

俺にはよろしくする気は全く無いが、今後の任務で一緒になるだろうから今はよろしくしておこう。

しかしアレだな、なんか長生きしそうなヤツだな。根拠は無いが。

「立て」

「え？」

「へ？」

気付くと、目の前になんか凄い格好したオバ……もとい、オネエサンがやって来たよ。

「立てと言っている！ 立たんか！」

一目で分かった。この人、鉄拳制裁タイプだわ。学校にもこんな人いたな、担任とか。

「私の名前は、雨宮ツバキ。お前たちの教練担当者だ」

そういえば隣のヤツの名前聞いてないな。俺も自分の名前言ってないけど。

「この後の予定は、メデイカルチェックを済ませたのち、基礎体力の強化、基本戦術の習得、各種兵装の扱い等のカリキュラムをこなしてもらおう」

カリキュラムとミリグラムって似てるよね。……やつぱ似てねーわ。

「聞いているのか、比企谷」

「ひゃい」

急に怒るのやめて下さい。びっくりしちゃうんで。

「まあいい、今までは守られる側だったかもしれないが、これからは守る側だ。つまらない

事で死にたくなければ、私の命令には全てYESで答えろ、いいな？」

「いえす」

「藤木コウタ、わかったら返事をしろ」

「はいッ！」

隣のヤツ、藤木コウタって名前なのか。

「では、早速メデイカルチェックを始めるぞ。まずは比企谷、お前だ。ペイラー・サカキ博士の部屋に一五〇〇までに集まるように。それまでこの施設を見回っておけ」

やっぱりこの人、平塚センサーと似てる気がするぜ。特に『婚期を逃した感』がな。……なんか睨まれた気がする。気のせいかな。

さて、見回っておけとは言われたものの、どうしたものか。

「ねえ」

なんか話しかけられた気がするが多分俺じゃない。

「無視しないでよ」

服の裾を掴まれてしまった。

振り返ると、身なりのいい少女、いや、幼女がそこにいた。

俺の目を見て「うわ」って顔すんな。傷つくだろ。

「……あなた、こここの職員さん？パパどこにいるか知らない？」

「悪いな、ここに來たばかりだからよくわからん」

この状況にあの女が居合わせたら、ロリコンだの性犯罪者だのと暴言の嵐が吹き荒れるだろうな。

「そつか……その腕輪、あなたゴッドイーターなの？」

「……ああ、今さっきなつたばかりだ」

「新入りさん？」

「まあ、そうなるな」

「ふーん……」

「もういいか？」

「うん、またね、新入りさん」

呼び方が『新入りさん』ってどうなのよ。別にどうでもいいけど。

エレベーターを使い、下の階層へと降りる。

流石に建物がデカ過ぎて若干迷子である。

「……博士の部屋どこだよ」

「この階の一番奥の部屋だよ、比企谷くん」

「……」

思わぬ返答があつたが無視。

完全に名前を呼ばれたが、こればかりは無視させてもらおう。振り返ったら負け

だ。

「あーん、無視しないでよー、比企谷くーん」

ダメだ、捕まった。

「なんの用ですか、雪ノ下さん」

「んもー、久しぶりに会ったっていうのに冷たいなあ」

仕方なく、俺はゆっくりと振り向く。

無理やり会話終了させてゴリ押しで行けるか？

「メデイカルチェックがあるんで、それでは」

「うん、それじゃ……って、違う！まってまって！」
「チツ」

くそ。ダメか。

「比企谷君？あんまりお姉さんをからかうと……」

「すみません」

怖えよ。わりとガチで。

今俺と対峙しているこの人は、『雪ノ下 陽乃』。

俺が所属していた『奉仕部』の部長『雪ノ下 雪乃』の姉にして、頭脳明晰&容姿端正というチートステータスな完璧超人である。

何度か顔を合わせたことはあるが、俺はこの人をかなり苦手としている。なぜなら、訓練されたぼつちの観察眼を使っても考えている事がわからない上、こちらの考えはすぐに見透かされてしまうからだ。

現在は、フェンリル本部で幹部クラスの職に就いているとか、いないとか。

「今日はどうして此処に？」

「君がちゃんと神機に適合するか見に来たんだよ」

「……そうですか」

「で、君の神機、どうだった？カッコイイでしょ？」

「まあ格好良かったですけど、まるで自分が作ったような言い方ですね……」
「まあねー、でも発案して設計しただけで後は技術者に任せちゃったけどね」
「…………え？マジで？」

俺としては軽い冗談のつもりだったが、本当にこの人が俺の神機を作ったらしい。

「ちよ、なんてことしてくれたんすか」

神機が作られなければ、俺が神機使いになる事も無かったはずだ。

俺の平和で平凡で孤独で卑屈な素晴らしい日々を返せ。訴訟も辞さない。

「いーじゃん、もしもの時は自分で誰かを助ける事も出来るし！雪乃ちゃんとかガハマちゃんとか小町ちゃんとかね」

う、と俺は言葉を詰まらせた。

確かに何度か防壁内にアラガミが侵入し、自宅や学校から中心部の方へ避難した事があつた。特に小町と走って逃げた時、周りと同じように何も出来なかつた自分に苛立ち

を覚えた記憶がある。

「それにもう神機使いになっちゃったんだから、諦めなよ」

「……わかりましたよ。もう時間なんで行きます。」

「あはは、これから大変だろうけど頑張ってるね、比企谷くん」

「うす」

もう頑張ってるわ。ストレスで寿命がマツハ。表彰されてもいいレベル。

このあとメデイカルチェックを受けた俺だが、博士の部屋に入った段階で「予想より
88秒遅いね」って言われた。俺は悪くねえ！

#02 なんにせよ、慣れというのはおそろしい。

「うおおあああああ！小町イイイイイイイ！！」

もうだめだ。

家に帰りたい。

小町に会いたい。

小町の声が聞きたい。

小町を抱きしめたい。

小町に――

ハッ、あぶないあぶない、もう少して俺の精神が暗黒面ダイクサイドに堕ちるところだった。

小町を汚すものは断じて許さん。それが自分でも許さん。

神機使いになって二日目の朝。

朝起きて、コーヒーを淹れ、支給されたばかりのレーションを口に入れた時だ。

唐突に、小町の作ったご飯が食べたいと思ってしまうのだ。

もうお兄ちゃんダメかもしれない。

それにしても憂鬱だ。

今日も厳しい訓練やら座学やらをへ口へ口になるまでさせられて、夜遅くにベッドにダイブ。

こんな未来が見え――

いや、今日は実地演習だったか。



そんなこんなで、旧市街地エリアにやってきました。

俺が所属するのは第一部隊。隊長の雨宮リンドウは、ツバキ教官の弟らしい。

なんでも、噂によると『リンドウさんにくつついていれば生きて帰れる』との事。

噂だけでは、強いのか逃げ足が早いのかは判断しかねるが、生きて帰れるに越したことはない。

で、その雨宮リンドウは今、俺の目の前に立っている。

「よし新入り、今から実地演習を始めるぞ」

「うす」

「んー？どうした？緊張してんのか？」

「うわー、リンドウさんってこういうタイプ？」

「元気がないなーもう一度！とかするタイプ？」

「ま、肩の力抜いて、気楽にいこうや。危なくなったらサポートしてやつからよ」

全然そんなタイプじゃなかった。

はいゴメンナサイ。

「んじや、命令は三つ、死ぬな、死にそうになったら逃げろ、それで隠れろ、運がよかつたら不意を突いてぶつ殺せ」

「それ四つつす」

「お、いいツツコミだなあ」

おい、俺のスルースキル働け。

「まあ、そんな訳で、任務スタートといきますか」

「うす」

討伐目標は「オウガテイル」、世界で最も個体数が多いとされている小型のアラガミだ。

小型というだけあって体格は小さく、行動パターンも比較的単純。新兵の初陣にはもってこいのアラガミだろう。

でも、油断すればもちろん死ぬ。オウガテイルに喰われた神機使いも少なくない。

早速、前方数十メートル先にオウガテイルを発見した。こちらには気づいていないようだ。

基本的に、リンドウは戦闘に参加しないようだ。つまり、実質一人での任務になる。だが俺にとって、なんの障害にもならない。何年ソロプレイしてきたと思ってるんだ。

先制攻撃は戦闘の基本だ、ということとは座学で学んだ。

俺は神機を銃形態へと切り換える。この切り替える動作も散々練習させられた。

思い出せば訓練は厳しかったが、俺がアラガミにさほど恐怖を感じないのは訓練のおかげといえる。

銃身はスナイパー、遠方からの正確な射撃ができるタイプだ。

チームの場合、射撃は、近接攻撃できる仲間が先行してから援護をするのがセオリーだが、今は俺一人。

一気に頭が冷えていく。なぜか俺の思考には逃げるといった概念は生まれてこなかった。

まあ、逃げてても仕事は終わらんからな。

俺は、引き金を引いた。銃口から放たれたレーザー状のオラクルは、一瞬にしてオウガテイルの右目に命中する。

「よし」

通常の生物なら、頭部を銃で打ち抜かれたら確実に絶命してしまうだろうが、アラガミはそんなことでは死なない。

オラクル細胞の集合体であるアラガミは、手足がちぎれようが首から上が吹き飛ばさ

が、コアが生きていれば動き続ける。

コアを摘出すれば済む話だが、そのためには神機でダメージを与え、無力化する必要がある。

だが、死なないとはいえ、手足がちぎれば動けないし目を潰されれば視覚を失う。

狙撃で目を狙ったのは、オウガテイルの視野を狭める為。

さらにオウガテイルは側面への攻撃パターンが限られている。

右目を潰した事で死角になった側面から回り込めば、優位な状況からの追撃が可能だ。

オウガテイルは突然の事に驚き、吠え散らす。

「うっせえ」

向上した自分の身体能力は既に把握済みだ。

数十メートルを一気に駆け抜けると、未だ混乱しているオウガテイルを水平に薙いだ。

すると真つ二つに切り裂かれ、その場に崩れ落ちた。

「は？」

なんだ、この異様な切れ味は。

シャーペンよりもシャープすぎる。

この神機スゲエ強いんですが陽乃さあん！

流石に驚いたが、討伐が楽になるのはとてもいい事だ。

神機の性能についてはさておき、任務完了。

討伐目標は沈黙。コアの回収も忘れない。

完璧だ、完璧すぎるではないか。ふはは。

上手くいきすぎて夢じやないかと一瞬考えもしたが、現実だった。よかった。

「おう、やるなあ新入り、これなら背中を預けれそうだ」

「ども」

リンドウは、既に神機を片手に煙草を吹かしていた。

「新入り、お前、面白い戦い方するなあ」

「そうですかね」

別に変わった戦い方じゃないと思ってたんですけどね。

遠くから不意打ちして、距離を詰めて追い打ちつてのは基本じゃないんですかね。

卑怯に聞こえるけど、立派な戦術だからね、仕方ないね。

「ああ、罨とかスタングレネードとか使ったらもつと面白くなりそうだ。という訳で……」

と、リンドウは俺に丸い物体を渡す。

「先輩からの餞別ってヤツだ」

「ど、ども」

渡されたのは、スタングレネードだ。

要約するに『もつと罨とか使え』ということだろう。

だが正直、支給されている個数が少ないのでありがたい。

「まあ、今後ともよろしくな新入り……おっと」

不意にリンドウは通信端末を取り出した。

「……緊急帰還命令？——ああ、ワリいな新入り。もう帰る時間だよ」



ロビーに戻ってくると、同期の藤木コウタが話しかけてきた。

「お、ハチ、実地演習どうだった？」

「ん、なんとかなった」

まるで友達のような会話だ。やめろよ、友達なのかと思っちゃうだろ。

これは座学や訓練をほとんどコウタと合同でやっていたため、互いに会話をするようになったのが原因である。

だが、もちろん俺から話しかけたことは無いし、今後話しかけることもほぼ無いだろう。

「コウタはどうだったんだ？」

俺が珍しく話を振ってやると、コウタは嬉々として喋りだした。

「いやーそれがさ！サクヤさんって人と任務だったんだけど、メチャクチャ美人でさ！」

なにそのザ・リア充みたいな話。

「へえ」

「見とれちゃって任務どころじゃなかったよ！」

「そうか」

「ハチ……なにその雑な相槌……」

「ぼっちは大体こんなもんだろ」

こんなもんだからぼっちなのだ、という事は一番自分が理解している。

だからといって、改善する気があるわけでもない。

ちなみに、俺がコウタをファーストネームで呼んでいるのは、本人の意向だ。

最初に『藤木』と呼んだら、「いや、コウタって呼んでよ」と言われ、俺としても何ら利害があるわけではないので、要望通りファーストネームで呼ぶことにした。

ちなみに極東支部では、ファーストネームで呼ぶことがほとんどらしい。

それにしても、俺と会話するなんて、こいつはいい奴なのだろうか。いい奴なのだとしたら、うまく話を広げられなくて申し訳ない。

あまりにも申し訳ないのでやっぱ俺からは話しかけないようにしよう。

「なあ、ハチ」

コウタがターミナルへのアクセスを止め、こちらに向き直る。

「あ？」

「なんか、人いなくね？」

言われてみると確かにそうだが、ここに来て日は浅いので異常なのかはわからない。

「なんかあつたのかな？」

「いや俺に聞くな」

まあ、思い当たる節があることにはある。

そのことを言おうか言うまいか悩みかけたとき、俺の後ろから声がした。

「アラガミの襲撃ですよ」

「あ、ヒバリさん」

コウタの問いに答えたのは、極東支部のオペレーターである竹田ヒバリ。

例によつて皆は「ヒバリさん」と呼ぶので、俺もそう呼ぶことにした。他意はない。

俺としては女の人を下の名前で呼ぶのには抵抗があるが、苗字で呼ぶと何故か違和感があるので俺の呼び方が多少キモかろうと我慢して頂きたい。

「現在はアラガミの大群を防壁外で殲滅する為、作戦行動中です」

「え、俺たち、行かなくていいのかな？」

「まだ新米の俺らが出ても足引つ張るだけだろ」

コウタ君、話聞いてた？

大群だよ、大群。

そこに出撃とかどんな戦闘狂だよ。今時アラガミもそんな無謀なことしねえよ。

「お二人にはツバキさんから待機命令が出ています」

「あ、了解です」

仕事をしなくていいのは純粹に嬉しいが、他に何もする事は無い。

つまり、暇だ。

ふと隣を見るとコウタと目が合った。

『暇になっちゃったことだしさ、オレの部屋でバガラリー観ようぜ！』

……などとコウタが言い出しかねないので、俺はそそくさと自室に戻ろうとする。

「なあハチ、今から一緒にバガラリー観ない？」

ここでため息を一つ。

観ねーよ。

ねえ、ホントは俺の思考、テレパシーで伝わってるんじゃないの？

知らない間に考えてることが漏れ出しちやてるんじゃないの？

誰かアンチリーク剤ください。

「いやー、この前見逃しちゃったんだよねー」

コイツ完全に観る方向にシフトしてやがる……

だが断る。

「おいこら俺は——」

観ないぞ、と言おうとした瞬間だった。

無機質な警報音が、アナグラ中に鳴り響いた。

『緊急連絡、多数のアラガミが最終防衛ラインを突破。待機中の戦闘員は直ちにN地区へ出撃してください。繰り返します——』

「コレって、結構やばいんじゃない？」

コウタが声を漏らす。

だが、俺は別のことを考えていた。

「N……地区……」

気がつけば、俺はアナグラを飛び出していた。

——小町が危ない。

#03 それでも、彼は足掻き続ける。

「お兄ちゃん、手紙きてるよー」

風は冷たくとも、日差しは暖かい。そんな日のこと。

俺の妹、小町が差し出したのは真っ白な封筒だった。

「俺に？」

「そうだよー、珍しいねー」

小町よ。

その「珍しい」というのは、この時世に手紙が来る事が珍しいという意味か？

他者との関わりがまるで無い俺に手紙が来るのが珍しいという意味か？

……たぶん後者だな。涙出てきた。

小町の言う通り、宛先にはきっちり俺の名前が記載されていた。

「で、誰から？誰から？」

「元氣だなお前は……」

俺は小町に促されるがままに差出人を確認した。

差出人は、フェンリル極東支部。

そのまま封を開け、中身を取り出す。

——ああ、そういうことか。

入っていたのは、誓約書とか申請書などの書類が数枚。

ここまで来てようやく俺は全てを把握した。

要するに、だ。

フェンリルは、俺に『ゴツドイーターになれ』と言っている訳だ。

「おにい……ちゃん、これ……」

「……小町」

俺は小町の頭をそつと撫でた。

家族がまた消えてしまうのが怖いのだろう。

——ただ会えないのではなく、この世から去ってしまうということが。

「流石にこれは、逃げられねえからな」

その言葉はまるで自分に言っているかのようだった。

「心配すんな、小町を残して行かねーから」

俺と小町の両親は、既にこの世には存在しない。

死因はアラガミによるものだ。

現時点で、小町の家族は俺しかない。

俺にとつても小町しかない。

だから、生きなくてはならない。
俺も、小町も。

そして、守らなくてはならない。
俺が、小町を。

「お兄ちゃん、約束だよ」

「おう」

小町が足元の猫を抱き抱えた。知らないうちに住み着いた野良猫だが、ちゃんと名前がある。

「にゃー」

そうだな、カマクラ、お前も家族だったな。
小町のついでに守ってやるよ。



ゴッドイーターの身体能力を駆使し、突っ走る。

さつきまでかなり慌てていた俺だが、走ってるうちに冷静さを取り戻していった。

落ち着け、まだあわてるような時間じゃない。

辺りを見渡せば、アラガミから逃げる人々で埋め尽くされていた。

下手したら人酔いするぞ俺は。

アラガミの姿はない。防衛ラインは破られたが、対アラガミ装甲壁は突破されていないのだろう。

だからといって、安心してはいられないのは確かだ。

装甲壁はオラクル細胞の『偏食』という性質が利用されている。

人に食べ物の好き嫌いがあるようにアラガミにも好き嫌いがあるらしい。

それを踏まえて、アラガミが嫌う食べ物で壁を作つてアラガミに接近させない、という寸法だ。

だが、現状でこっちに向かってくるアラガミがいるということは、『対アラガミ装甲

壁』なんてもはや『対アラガミ装甲壁（笑）』である。まあ、そうならないように神機使いは日々アラガミのコアを回収し、装甲壁の偏食傾向を更新し続けているわけだが。

小町は逃げてくれただろうか。

とにかく俺は、援軍が来るまでの時間稼ぎをしなくてはならない。

自宅はもう目の前だ。一応、家の中を確認しておくか。

と、玄関のドアが勢いよく開いた。

「うおっ！」

目の前に飛び出してきたのは、俺の生きる希望だった。

「あ、お兄ちゃん！」

あ、お兄ちゃん。じゃねーよ！

「何してんだ！早く逃げろ！」

「いやー、カーくんがダンスの隙間に入り込んじやって……」

そう言う小町の胸にはカマクラが抱き抱えられている。
と、再びドアが大きく開かれた。

目の前に飛び出してきたのは、ゆるふわビッチだった。

「あつ、ヒッキー！」

あつ、ヒッキー。じゃねーよ！

「なんだ由比ヶ浜か」

「ちよつとヒッキー！なんだってヒドくない!？」

由比ヶ浜は奉仕部の部員だ。紹介おわり。

それよりもだ。

もう壁が破られそうだったのにこの状況はかなりマズい。

つーか何で由比ヶ浜が小町と一緒にいるんだ。

おっと落ち着け、慌てるな、俺。

まずは、小町と由比ヶ浜を避難させなくては。

最悪、俺がアラガミと戦ってでも小町と由比ヶ浜を逃がす。

いや、まてよ。

———そういえば、神機を置いてきちまったな、俺。

これじゃ戦えないね、はちまんミステイク☆

「……しまったアアアアア!!」

「お兄ちゃん!」

「えっ、ヒツキーどうしたの!」

いかん、不覚にも取り乱しちまった。

ここで小町に不安を与えるわけには……。

「大丈夫だ……問題……ない……」

「いやお兄ちゃん、全然大丈夫じゃないでしょ！目が凄い腐ってるよ！」

というか、ここでこんなこと話してる場合ではない。

「ほっとけ元からだ……それよりお前らは早く逃げろ」

「お兄ちゃんは!？」

「ヒツキーは!？」

……息ピッタリかよ。お前ら姉妹なの？

小町の兄として自信なくしちやうんですけど。

「……俺は仕事だ」

俺は赤い腕輪を掲げ、神機使いとしての仕事ということを示す。

その時、ドッカーン！と盛大に装甲壁が砕け散った。

「っ！伏せろ！」

俺はとつさに小町と由比ヶ浜を抱え込む。ひやつ、と二人は声を上げるが、落下してきた瓦礫が砕ける音でかき消された。

しばらく耐えていると瓦礫の雨は止み、俺は立ち上がりながら二人の無事を確認する。

「さて、と」

さあ問題です。シスコンの俺にとって、仕事と妹（+α）はどちらが大事でしょうか。

答えは、聞くまでもないな。

「走るぞー！」

え、仕事？

ちよつとなにいつてるかわかんないです。

俺は小町と由比ヶ浜の手を取り、走ってきた道を引き返した。

しかし小町も由比ヶ浜も神機使いではないため身体能力は常人レベルだ。このままでは壁を突破してきたアラガミに追いつかれてしまうだろう。流星に二人も担げないしな。

ちなみにシエルターなんてモノはない。装甲壁が突破された以上、最も安全な場所はアナグラだ。

俺は思考を巡らせた。

壁外の戦闘員が戻ってくるのが先か、アナグラからの援軍が先か。

壁外の戦闘員を待つならばここで小町たちを物陰に匿い、俺がアラガミを引きつけて時間を稼ぐのがいいだろう。逆に、アナグラからの援軍を待つならこのまま走り続けたほうがいい。

しかし壁外にはほとんどの戦力が割かれ、今のアナグラの戦力では決定打に欠ける。援軍が簡単に突破されてしまった場合、丸腰の俺では太刀打ちできない。

くそ、どうすればいい。

「……ヒツキー！」

俺が自らの優柔不断さに嘆いている中、由比ヶ浜が声を上げた。

「なんだ？手が汗ばんでるのは気にすんな」

「違うつてば！アレ見て！」

由比ヶ浜が後ろに指を差す。

「なっ……」

禍々しくも神々しい光を放つソイツは、炎と煙に包まれていた。

ボルグ・カムラン神属、第一種接触禁忌種『スサノオ』——。

神機を好んで捕食するという偏食傾向を持ち、『神機使い殺し』の異名を持つ。そのため、一般の神機使いの接触は禁止されている。

でも俺は神機を持ってないから狙われないかもしれない。やったね。たぶんコイツが親玉だな。

中型アラガミくらいなら何とかなつたかもしれないが、スサノオ相手では引き付ける以前に瞬殺されてしまつたらう。ならば、逃げるか。

そう思つた矢先、前方にアラガミが飛び出してきた。

「なんだよ……早いな……！」

現れたのは逞しい体躯を持つアラガミ『コンゴウ』。

聴力が高く、真空波での攻撃を得意とするアラガミだ。

マズい。ヤバい。最悪の状況だ。前にはコンゴウ、後ろにはスサノオ。

神機があれば強行突破できたかもしれないが、その神機が無い。

何が「スサノオに狙われないかもしれない」だよ。数秒前の俺ぶん殴りてえ。

荒神が蔓延る世界で神に助けを求めるのは癪だが、もう神頼みするしかないな。

コツン、と何かが俺の手に当たつた。

そうだ、まだ打つ手はある。投了はまだ早い。

アラガミよ、詰めが甘いぜ。MAXコーヒーくらいにな。

「耳と目え塞げ！」

小町と由比ヶ浜にそう叫び、俺は灰色の球体を前に放り投げる。

球体はコンゴウの目の前に落下した瞬間、閃光と爆音を発した。

球体の正体はもちろん、リンドウさんからもらったスタングレネードだ。

心の中でリンドウさんに感謝。

俺はもう一度、二人の手を取って走り出した。そして行動不能状態に陥ったコンゴウの横をすり抜ける。

——高い聴覚が仇あだになったな。さっきのはカミサマへのお供えだ、有り難ざまく思あえみろ。

もうすぐアナグラだ。このままなら逃げ切れる……わけでもない。

俺が期待して、裏切られなかったことなんて無い。

「お兄ちゃん！」

気づいてるよ、追っかけてくる別のコンゴウだろ。しかも二体。

思い出したよ、コンゴウは群れを形成するってこと。データベースに載ってた。

追いつかれる前に、俺は小町と由比ヶ浜を狭い路地に退避させた。

小町の腕の中でカマクラは欠伸をしている。呑気なヤツめ。

「すぐ助けが来るからな」

「お兄ちゃん……」

流石、俺の妹。俺が今からすることを理解していらつしやる。

「心配すんな、無理はしない」

不安にさせないようにフォローも忘れない。俺マジ紳士。

「……ヒツキー！」

由比ヶ浜が俺を引きとめようと腕を伸ばす。だが俺はその腕をするりと躲した。由比ヶ浜の目は潤んでおり、少しだけ罪悪感が湧く。

だから俺は、償いの代わりに言った。

「由比ヶ浜。依頼、頼めるか」

俺からの依頼に由比ヶ浜は少し驚いた様子だったが、すぐに真剣な表情に戻り領いた。

「部長によろしく」

そう言い残して返事も聞かぬまま、俺は通りの真ん中へと躍り出た。

あんな依頼、相手がまだ了承してないので口約束にすらなつてない。

我ながら卑怯なことをしたものだ。

それにしてもあいつら、アラガミに追われている中でよく平常心を保てたな。意外と凶太い性格してるのかもしれん。

俺が今からやるのは囧だ。

死亡フラグも立てたしな。でも死亡フラグは立てすぎると逆に生存フラグになるらしい。

やっべ、麻痺していた恐怖心が今になって再稼働してきた。

ま、どうせやらなければ死ぬだけだ。

俺は、気配の消し方を知っている。逆説的に、何をすれば目立つのか知っている。

手っ取り早く、確実に目立つ方法。それは――。

怒らせる。

これは人間に限った事ではない。犬でも猫でも怒りの対象になったものは否応なしに注目される。

ソースは俺。

「さあ来い！クソアラガミ共！」

言いながら、手に持った瓦礫を二体のコンゴウに投げつける。ほとんど直線的に飛んでいった瓦礫は見事に命中した。さあ、怒れ。トドメに口角を釣り上げて精一杯見下した視線を送ってやった。

グオオオオッ！と呻りながら突進してくるコンゴウを躲す。俺には反撃する手段がないので、回避に専念する。振り回される腕。全体重を乗せたボディプレス。時には、見えないはずの真空波をギリギリで躲していった。

簡単に挑発に乗ってくれて結構助かった。

コンゴウの群れを引き連れながら移動して、小町たちが逃げる隙を作ろうかと考えていた時だった。

「カーくん！ダメツ！」

そんな叫び声と同時に、小町が狭い路地から飛び出して来たのだ。小町の走る先にはカマクラがいた。

カマクラはアラガミの間を縫うように走り、瓦礫の隙間に入り込んでいつてしまった。つまり小町はその場に残された形になってしまふ。

新しい食べ物を見逃すはずもなく、小町に襲いかかる。

ほぼ脊髄反射だった。

俺は、アラガミを見て立ち竦んでしまった小町を押しつけて、腕を振りかぶったコンゴウの前に出た。当然、殴られるのは俺である。

「か……はッ」

クリティカルヒットだった。腹の中の空気が全て外に出た。なんなら血も混じって

いたような気もする。

俺は壁に叩きつけられてズルズルと座り込んだ。

肋骨が3本逝つたな、とかカツコイイことを言ってみたかったが声が出ない。

つーか折れた本数とか実際わかんねえよ。

コンゴウは俺の目の前で腕を振り上げる。

人生の終わりを覚悟した俺に、何かが覆いかぶさつた。小町だ。

このままでは、小町も――。

逃げろ、と言いたかったが声が出ない。守りたいのに体が動かない。

視界が暗くなる。音が遠ざかっていく。脳と身体との接続が途切れたかのような感覚。

焦燥感、恐怖、絶望。全てに支配されたその先にあるのは、死。

小町――。

突然、キーンと耳鳴りがした。

――お兄ちゃん。

何も聞こえなかったのに、小町の声が響く。

——死なないで。

一瞬、脳裏に浮かんだのは膨大な量の記憶の奔流。走馬灯というヤツだろうか。

——約束、したじゃん。

約束。

それは、自らに課した“誓約”——。

何としてでも守り抜く。

俺は守りたい。

だから小町——。

力を、貸してくれ——。